第6号　1975年4月20日

プロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘の旗を更に高く揚げ、四面党派闘争—党の武装・建軍—組織戦をおし進めよう！

3・31集会会場のもよう

プロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘創建のために闘おう！

全国の同志、友人諸君！労働者階級の全ての先進闘士諸君！

我々は機関紙前号（5号）において、プロレタリア革命派の第一の緊要の任務がプロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘の創建であり、この方向に全ての革命的諸党派、諸グループを再編、統合していく闘いこそ焦眉の課題であると呼びかけた。そしてそのためのいくつかの基準と原則、諸党派の分化と再編をつかむ基準を明らかにした。

言うまでもなく、我々のこのプロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘創建の呼びかけと提起は、狭いセクト的観点と利害から出発しているのでもなければ、経済主義者の運動の危機感に基づくものや、形を変えてくり返し登場してくる過去への郷愁、未練に基づく、無原則的な野合の志向でもない。我々はそのような観点と志向を断固拒否するし、今後もプロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘の桎梏であるそういうものとは一貫して闘っていく用意がある。又、一時的な戦術上の提携でもない。

我々がこれを焦眉の最も緊要な任務として提出しているのは、ただ以下のような見地から出発しているのである。

第一に、五十年代後半～六十年代の相対的安定期に現代修正主義に反対し、それと闘争して自己を形成し、成長させてきた小ブル革命派たる反スタトロッキズムの新左翼諸派と毛教条主義の毛派が自己の党的路線的命運、飛躍をかけて闘った七〇年安保大会戦と、その頂点であり締めくくりであった連赤「新党」問題を決して清算することなく、この闘争と矛盾の歴史的発展を「一が分かれて二になる」の「対立物の統一と闘争の法則」を具体的—歴史的諸条件の総体と連関において貫く唯物論的弁証法によって総括し、「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義へ」「反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止揚」を、思想—政治路線を基礎に網領—総路線において実現し、鍛え上げていく闘いが、今や大道につき、着実に物質化され始めたことである。我々はまさにこの闘争が、単一のプロレタリア前衛党建設の基礎としてあった新党志向を結実させる闘いの中で生じた「二つの道の闘争」—資本主義の道と社会主義の道、ブルジョアジー独裁とプロレタリアート独裁の二つの道の闘争—を継承、発展させ、再新党—プロレタリア単一党へと結実させていく最も基本的な、核心的なものであることを再三にわたって明らかにしてきた。この核心を曖昧にも、放棄することは、結局のところ「左」右の清算主義、教条主義、中間主義に陥り、ある部分は経済主義、大衆運動主義・合法党の方向に大きく方向転換し、ある部分はその裏返しとして、口先だけの空文句をはいてサロン化し、自分は闘わないで、テロリズムや戦闘団主義に、これに拝跪する仕方で寄生するようになり、又両者の間でのたえざる動揺を生み出している。又一方には民主主義的連合組織を、他方には小集団主義・セクト主義をはびこらせている。

「左」右の清算主義との闘争によって発展させ、鍛え上げてきた我々の闘争は、今着実に労働者階級の自覚的な先進闘士、革命的分子を引き寄せ、結集し、七十年代革命勢力をはじめとする労働者階級勢力との間に着実な結合をつくり出し、新たな前進と跳躍への基礎を築き上げてきたのである。今やそれを一つの潮流へと高め上げていかねばならない。

第二に、今日の世界大動乱—資本主義から共産主義への世界的な革命的転化の時代、腐朽せる死滅しつつある資本主義としての全矛盾が爆発し、世界プ

目次

プロ単一党—プロ武闘共闘の旗を更に高く揚げ、党の武装・建軍—組織戦をおし進めよう！……1
3・31赤軍派政治集会速報、獄中アピール——塩見孝也、増淵利行……6
にせ武闘派批判・第五回——共産同蜂起派（さらぎ）批判④……8
同志からの通信——プロレタリア革命主義の部落解放闘争を！……11

再刊準備6号
1975年4月20日発行
定価150円

連絡先
東京都板橋区板橋郵便局
私書箱19号　燎原社

ロレタリア革命がその能動的攻撃的力を強めながら発展しつつある時代、とくに帝国主義、社会主義が没落しつつも、相互に争奪しながら、侵略・抑圧・反革命をあくことなく続け、これに対して全世界プロレタリア人民の反帝反社帝の持久的二正面対峙の闘いが発展し、来るべき世界革命の大進攻を準備しつつある戦争と革命の時代の成長、この下で、反帝反社帝ー世界プロレタリアート独裁・世界共産主義の旗の下に、継続革命ー根拠地化、民族解放ー社会主義革命、プロ独・社会主義革命を反帝反社帝世界革命戦争の勝利へとおし貫いていくプロレタリアートの世界軍の一部隊として、わがプロレタリアートの革命的隊列を整え、その革命的進攻を準備することが我々の国際主義的義務となっていることである。とりわけ第三世界人民の闘いの支持、毛沢東思想の支持を鮮明にし、この支持を反帝反米反社帝、プロ独・社会主義革命の闘争として貫くプロレタリア単一党建設を核心にして、国際主義的義務を実行しなければならない。

第三に、日本労働者階級は、今日、帝国主義の汎ゆる災禍と犠牲の強制、圧迫に抵い、社会帝国主義の裏切りに抗し、徐々に共産主義と結合するところまで成長してきており、今では舞台の前面に登場して現体制の根本的ー革命的打破とプロレタリア革命のために全被搾取勤労大衆の領袖として偉大な歴史的役割りと力を発揮することその司令部を求めていること。我々の任務はこの労働者階級の客観的ー歴史的要求に立脚している。実際、さざ波の表面よりももっと深くを見ることのできる人、深部で行われている過程を識別することのできる人には、労働者階級の現体制への自然発生的な憤激と反抗が、腐り果て大きく揺いでいる戦後日本資本主義の歴史的な矛盾と破綻、資本主義的生産様式の根本的矛盾のらん熟に根ざした底深いものであること。改良主義の欺瞞的な無力な空理空論ではなく、果てしなく強まる一方の災禍と犠牲、圧迫を根本的に打破する革命的方策と行動への熱望を昂めていること。この要求と熱望を結集し系統的に組織し教育して、ブルジョアジーを打倒し、武装解除し、収奪する社会主義革命の革命的闘争へと移らせていくことのできる指導的ー革命的中核の力強い呼びかけと戦闘力を求めていること、このことを感じることができるであろう。実際、わが労働者階級の闘争は、今、反帝反米・反社帝二正面対峙戦のさなかにあり、それ自身世界プロレタリア革命戦争の戦略的対峙の反帝反社帝二正面闘争の前進の一環にほかならない。そして、第三世界の民族解放ー社会主義革命戦争の勝利的前進と、その根拠地たる革命的社会主義諸国の継続革命ー根拠地化の闘いに益々勇気づけられ、支持共感を深め日米帝国主義の天皇制を押したてた、又その「左」足としてそれを競合しつつ補完する社会帝国主義のなしくずしファシズムの大攻撃に対する激しい対立を深めているのだ。そして現在では「汎ゆる革命の根本問題」である国家権力の問題が、プロレタリアートの階級闘争にとって今や緊切の問題であること、労働者階級の権力奪取ープロレタリアート独裁と、そのための系統的な不退転の闘争を現実の実践的任務として確固としておし進めることのできる強固な革命的勢力の結集をこそ要求しているのである。それこそが労働者階級の今日の闘争・全運動の中心問題であり、中心的利害である。このことをいささかでも曖昧にすること、そのために闘うことからいささかでも後退することは、プロレタリア運動をしてそれだけブルジョアジーや小ブルジョアジーに従属させ、追随させていくことを意味する。実際、意識ある先進的労働者は、日常闘争、部分的要求と利益のための闘争とこぜりあいへの没頭と分散や、新しい日和見主義・プロレタリアートの階級闘争を民主主義闘争に狭めようとする潮流が結局のところ社共に反対派として追随することに他ならないことをあきあきする程感じており、又その裏返しとしてテロリズムや戦闘団主義に拝跪し、それに寄生して口先だけの空文句を吐く傾向にも苦々しく感じている。

だからこそ、労働者階級に、わけても労働者下層に立脚し、その階級苦、労働苦をマルクス主義によって汲み取ることができ、その根底にある経済的隷属からの解放のために闘っていくプロレタリアート独裁・社会主義革命の路線、日米帝国主義・社会帝国主義を全面的に暴露し、それと全線で系統的に闘い、プロレタリアートと半プロレタリアートの大衆の中に、一目瞭然たる社会革命の宣伝と煽動をくり広げ、彼らの革命的自覚と革命的決意をよびさまし、プロレタリアートをたすけて革命的行動に移らせ、社会主義に向って前進させていくこと、そのために反帝反米反社帝、プロ独、社会主義革命の路線（決して空論的な即時社会主義実現論ではなく、過渡期の一連の革命的諸方策の政綱をもった）の下に、全国的な革命的組織をつくり上げ、結集し、統合していくことが我々の義務となっている。

第四に、現在の戦争と革命の時代の深まり、天皇制を押し立てた汎ゆる反動的反革命的勢力を結集し動員したなしくずしファシズムー侵略反革命（戦争）の上からの内乱攻撃の準備、第三世界人民の帝国主義、社会帝国主義の再分割、反革命強盗戦争への衝動と策謀を打破る革命戦争の勝利的前進、激しく圧迫され、おしつめられているプロレタリアート・半プロレタリアートの下層の大衆の激しい暴力的闘争の数々とその敗北による教育、そして七〇年安保大会戦の経験とより深く、大規模で激烈な階級闘争の昂揚の準備、これら一切は、反帝反米反社帝、プロ独、社会主義革命の闘争がブルジョアジーに対するプロレタリアートの革命的戦争・プロレタリア革命戦争ー建軍、攻撃的峰起の進攻戦略を貫いた闘争としておし進めねばならないこと、ただそれだけが現在の反帝反米・反社帝二正面対峙戦をプロレタリアートの権力闘争として高め上げていく唯一の道であり、この不退転の闘争だけが汎ゆる災禍、犠牲、圧制を打破していく唯一の活路であることを益々明瞭にしている。「国家の問題の核心は被抑圧階級が武器をもっているかどうか？であり」、「プロレタリアートに対抗するブルジョアジーの武装は、今日の資本主義社会における最大の、最も根本的な事実の一つ」であり、プロレタリアートにとって「搾取者を収奪し、武装解除するためのプロレタリアートの武装」は根本問題であり、「労働者階級の軍隊はプロレタリアート独裁の第一条件である。」

だからこそ、七〇年安保大会戦においてわが赤軍派を始めとする武闘派によって着手された武装と軍事の問題を清算することなく、これを階級依拠路線と路線第一の党の武装・建軍の問題として止揚するプロレタリア的ーマルクス主義的軍事を組織すること。党を非公然・非合法を基礎とした武装組織として鍛え上げること。これは全くもって重大な実践的任務である。反帝反社帝世界プロレタリア革命戦争として、継続革命ー根拠地化の闘い、民族解放ー社会主義革命との結合はその条件であると共に、又このことによって実行され、鍛え上げられるのだ。又このことがプロレタリアートをたすけて革命的行動に移らせる方向で活動するために革命的情勢に応じた組織をつくり出すという義務である。プロレタリア革命派はこの義務を共同して実行し、高め上げていかねばならない。

我々のプロレタリア単一党ープロレタリア武闘共闘への呼びかけは、ただ、「共産主義者は全プロレタリアートの利害と別個の利害を持たない。彼らは特殊な原則をうちたてて、プロレタリア運動をその型にはめこもうとするものではない。共産主義者は、一方ではプロレタリアの種々の民族的闘争において、全プロレタリアートの共通の国籍に左右されない利益を強調し、おし貫く。他方では、彼らは、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争が経過する種々の発展段階において、常に運動全体の利益を代表する。」（共産党宣言）の見地に根ざしており、又「有産階級の集合的な力に対す

る闘争において、労働者階級によってつくられた全ての政党に対立する独自の革命的政党に自分を組織することによってのみ階級として行動することができる。このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに不可欠である。……すでに経済闘争によって達成された労働者階級勢力の団結は、又、労働者階級の手中において、自己の搾取者の政治権力に対する彼らの闘争のテコとして役立たなければならない。……政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている。」（国際労働者階級一般規約）という立場に貫かれている。

統合のための基準と我々の任務

だが、そうであるからこそ、我々は又原則的な統合をこそ求めている。しかし我々はそれを決して、教条を振りかざして原則的統合を教条におきかえる教条主義でもって行なうことであるとは考えない。現在では教条主義である人々程日和見主義である。我々の追求する原則的統合は、現実の革命闘争の歴史的試練と経験、その根本的で全面的な総括と教訓によってかちえた原則的基準に基づく統合である。

今日の諸党派の分化の徹底と再編は、六十年代の相対的安定期に自己を形成してきた小ブル革命派たる反スタトロツキズムの新左翼諸派と毛教条主義の毛派が、七〇年安保大会戦と連赤問題の試練を通じて、プロレタリア革命派と小ブル日和見派へと分化、再編をとげつつあること。そしてこの分化、再編は、七〇年代中期階級闘争が益々諸階級、諸階層の流動と活性化、対立と闘争を激しくするにつれて、一層大規模なものとなり、各々の階級的性格を露わにし、その武器を磨き上げねばならないことによって促進されている。我々はこれが不可避的なものであり、よいことであり、もっとくっきりと浮きぼりにし、促進していくべきであると考えている。

我々の原則的基準は、これまでも何度となく明らかにしてきたように、連赤問題の唯物論的弁証法の観点と方法による総括によってかちえ、「左」右の清算主義との闘争によって発展させてきた「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義へ」「毛沢東思想支持、反スタトロツキズムと毛教条主義の同時相互止揚」であり、「階級依拠路線と路線第一の党の武装、建軍を核心とする、経済主義とテロリズムを排した建軍ー攻撃的蜂起」の路線であり、一言でいえば、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の、反帝反米反社帝、プロ独、社会主義革命の単一党建設である。我々は又、このプロレタリア単一党の創建を、現下の労働者階級の歴史的要求にこたえ、その現実の領導力、指導的核心として打ち鍛え、よってもって単一党建設の事業を前進させていくために、プロレタリア武闘共闘を呼びかけ、その四つの原則を提起している。

我々はこのプロレタリア単一党ープロレタリア武闘共闘のために全精力を傾注して闘い、自からをその核心的部隊へと鍛え上げていくことを、我々の歴史的義務としておし進めていかねばならない。

我々の当面の任務は、このプロレタリア単一党ープロレタリア武闘共闘創建のために、第一は　四面党派闘争ーマルクス主義整風運動をくり広げ、我々の綱領ー路線を打ち固め、広め、深め、全国の労働者階級の先進的革命的闘士をこの綱領ー路線の下に一つの潮流へと結束させていくことであり、第二に、これを原動力にして、非公然、非合法を基礎とする全国的な革命家の組織を建設していくことであり、第三に、党の武装、建軍をおし進め、わがプロ革派を武装組織に鍛え上げていくことであり、第五に、プロレタリアート、半プロレタリアートの下層の大衆の中に更に深く、革命的宣伝、煽動をくり広げていくことである。

我々は今日の諸党派の分化と再編が、連赤問題総括と反スタトロツキズムと毛教条主義の同時相互止揚を核心としていることをくり返し明らかにしてきたが、右の清算主義、右翼日和見主義としての第四インター、日本労働党、「左」の清算主義、形は左だが実際は全く生命力を失った右翼日和見主義の仏派ー革左（神）の五・一五共闘、小ブル革命主義の革命的ではあるが多かれ少なかれ左翼日和見主義の小グループ、そして中間主義のために動揺的な革共同中核派とマル青同の四方面にわたって党派闘争ーマルクス主義整風運動をくり広げ、プロレタリア革命派の独自性と進出を打ち鍛え、独自の革命的潮流へ高め上げていかねばならない。我々のこの闘いは、反プロ革野合戦線を打破することによって、今新しい局面へと移り進もうとしている。そしてわがプロ革派の道は次第に、意識ある先進的労働者の中に、支持と共感を呼びおこし、結合をつくり始めている。

それと共に、これを原動力とし、この蓄積された力を基礎に、地下党建設ー党の武装ー政治・軍事・組織を統一する中央集権的な全国的革命家の組織の建設へ進み出し、そのように鍛えあげ、物質化していくことを緊急の任務、実践的環として日程に上せている。我々はこれを断固としてなしとげねばならず、又なしとげるであろう。その意味で我々はプロ革派結成後半年間の『準備的闘争期』とでも言うべき時期を基本的に終え、今や新たな前進と発展期に、すなわちプロレタリア単一党ープロレタリア武闘共闘を現実のものとして実践的に組織化する闘いに移り進もうとしている。我々はこの『準備的闘争期』において、五・一五の「左」の清算主義との闘争を中心に、我々の連赤問題総括、綱領ー路線を打ち固め、深めー路線第一を貫き、又民主主義的組織観を一掃し、「マルクス主義をやるのであって修正主義をやらない」「公明正大であって蔭謀をやらない」「団結するのであって分裂しない」という三原則を打ち固め、思想的政治的組織的密集力をつくり上げ、全国的基礎を築いてきた。我々はこの基礎の上に、この緊急の任務、実践的環を達成し抜くことに我々の最大の精力を注ぎ込み、真にプロレタリアートをたすけて革命的行動に移らせ革命戦争を領導しうる、非公然、非合法を基礎とする武装した革命的組織をつくりあげていかねばならない。

我々はそのようにしてわがプロ革派の政治的組織的水準と能力を高めて、一層広範に系統的に、プロレタリアートと半プロレタリアートの下層の大衆の中に社会革命の宣伝と扇動を、一目瞭然たる明確さでもってくり広げ、彼らの革命的自覚と革命的決意を呼びさましていかねばならない。

かくして我々は現在の反帝反米、反社帝二正面対峙戦をプロレタリアート独裁、社会主義革命へ、プロレタリア革命戦争ー建軍・攻撃的蜂起へ高めていく活路を切り開いていくであろう。これらの基礎の上に、天皇訪米阻止闘争の中に、新たな進攻の戦略的高地を戦取していかねばならない。

烽火はあがった！　非合法党建設の任務を双肩に担いきろう

三月三一日、連赤ー「新党」三周年のわがプロ革派の政治集会が開催された。それは二年間にわたる「左」右の清算主義のバツコに終止符を打ち、連赤問題総括ー一二名の立場ーブロレタリア革命主義を、再新党ープロレタリア単一党の基礎、核心・出発点として打ち固め、プロレタリア単一党ープロレタリア武闘共闘創建に前進してゆく最初の烽火であった。集会は百五十名程の小規模のものであったが、その大多数が先進的な、自覚的な労働者の結集によってかちとられ、途中で退席する者なく、最後まで厳粛に、かつ熱心に遂行された。職場でカンパを集め、わがプロ革派への寄金として持ちよった労働者、先進的労働者サークルの代表として参加した労働者、機関紙誌を五部十部と購入していった労働者、我々との間に連絡をつけようと全国各地方からやってきた労働者等々。又獄中の多くの

戦士から、真剣な、深い確信に満ちたアピールが寄せられた。あげられた烽火はささやかなものではあったが、しかし又確実な、将来巨大な炎として燃え上るにちがいない着実なものであった。湧き返るような熱気こそなかったが、真剣に求め、聴き入り、自分達の進むべき革命的道と任務を、又、プロレタリア単一党とプロレタリア武闘共闘創建の共同の活動と闘いにどのように加わり、おし進めるべきかを見出そうとする誠実な熱心さがあった。

我がプロ革派結成後半年間の、我々の連赤総括、綱領ー路線を打ち固め、広めるマルクス主義整風運動は、着実に意識ある先進的労働者の中に根づき、受け継がれていっているのだ。三・三一集会はその意味でも一つのバロメーターであった。プロ革派は生まれ出てまだ間もない。それは「左」右の清算主義主義との激しい闘争の中で生まれ、自己の独自性を育ててきたのであるが、現在も尚、形を変えた種々の清算主義、「左」右の日和見主義、反スタトロツキズムや毛教条主義と闘争して、自己の生存権を主張し、独自性を鍛え上げていく闘いのさ中にある。三・三一集会自身、仏派を主軸とする五・一五反プロ革野合ニセ武闘共闘との闘争を通じてのみ貫徹されたのであり、プロレタリア革命主義を掲げる部分の中の一部分子の小ブル日和見主義の動揺と後退ー観念論に彩られた新清算主義と野合への試みーとの闘争を通じてのみ貫徹された。これらの闘争が、旧い桎梏になっている立場にしがみつき、未練を残し、テロリズム学や経済主義に拝跪している日和見主義の生命のなさに比して、徐々に共産主義との結合に進みつつある、新しい先進的な意識ある労働者の中に根づき、結集し、新たな生命力を生み出していっているのだ。

勿論、我々は現在革命的少数派であることを曖昧にしない。それは我々を悲観させるのではなく、逆に我々の任務の大きさを示し、闘争への精力をかきたてるものである。実際、連赤問題後清算主義が抬頭し、支配した時期は二年以上にわたって続いた。一向同志を中心とする少数の人々が単独で、それと真に闘争し抜いてきた。革命的翼は後退と分解、分散を、更に混迷さえよぎなくされ、経験せざるをえなかった。今ではこの時期は基本的に終了している。進出の時期が始まろうとしている。しかし経済主義、合法主義へ進んでいる党派、日和見主義、民主主義派となっている党派が今尚優勢を保持し、労働運動の自然発生的昂まりは反政府的気運にのっかかって伸張している。他方ではテロリズムや召還主義に拝跪する傾向が革命的気分をもった人々の中に存在している。革命的翼は尚けわしい道を、集中砲火を浴びつつバラバラに進んでいる。だがまさに労働者階級の意識的な先進的な人々は、プロレタリア革命派がその確固たる路線の下に一つの潮流となり、非公然、非合法を基礎として彼らを統合し、進出をつくりあげ、今日の反帝反米・反社帝二面対峙戦をプロレタリアートの権力闘争へ、プロレタリア革命戦争ー建軍、攻撃的峰起へ活路を切り開いていくことを求めている。

我々は目前の、目先の利益やみせかけの大言壮語ではなく、プロレタリア革命戦争の着実な前進をつくり出す為の活動、労働者階級の自覚的な先進闘士、革命的分子を、路線第一の下にしっかりと統合し、彼らを教育し訓練し、非公然的非合法的基礎の上に武装させ、労働者大衆としっかりと結びついた革命的中核の隊列をつくり上げ、その独自性と進出を確え上げていくように努力するであろう。この基礎の上で、全ての革命的諸党派、諸グループとの共同の闘いと共同の活動を、我々自身が提示した基準に沿ってつくり上げていくであろう。

反プロ革野合戦線の五・一五共闘を
徹底的に打破せよ

我々は今ここで、早くも開店休業になっている五・一五共闘ーその中心たる仏派との間に一定の決着をつけておきたい。

仏派がその機関紙上で「自己防衛の絶対化か、自己批判ー相互批判による武闘派の団結か」と抑々しく言いたてたことがあった。だが一体誰が自己防衛の絶対化をやり、さもしいセクト的敵意をむき出しにしているのか。

連赤総括に客観的観念論を持ち込み、赤軍派ー連赤の闘いにどのような発展、路線上の発展もなかったかのように言い、ただただ「蜂起主義」なる誤った抽象的概念（絶対）がまず、普遍的に存在し、それが個別の姿をとって現われた現実化の過程であり、その必然的破産であったと、全く事実にも合致しない「命題前提主義」の観念論の主張でもって必死に全面清算しようとしているのは誰なのか。そして七一年に革命戦争派が直面した真に真剣で根本的な問題を隠蔽し、自己の日和見主義を防衛しているのは誰か。階級闘争・路線闘争と無関係に「天命論」の個人批判を持ち込み、階級的実践と無関係に、実践を捨象した「路線」闘争の書斉主義、評論をはびこらせ、路線を天才によって書斉の中であみ出される死んだドグマにし、論争を観念論、形而上学の泥沼にひきずりこみ、自己防衛しているのは誰か。このことは他ならぬ仏派の「蜂起派の敗北の総括」にも集中的に示されているではないか。いわく「理論や路線は一貫して正しかったが党的主体の敗北であった」と。仏君は理論や路線を党的主体、党建設と大衆的革命運動の実践と無関係なものと考えているのか。理論や路線がこの実践を基礎として生まれ、この実践の導き、指針としてそれに奉仕し、又この実践の発展に学びつつ発展していくものとは考えていないのか。仏君は結局このことによって、自分は「党的主体」の上に超然としており、実践と無関係に、書斉の中で何か絶対的な理論と路線を編み出そうとしてきたこと。

「党的主体」、実践はただそれに従属し、ついていくべきものと考えてきたことをバクロしているのであり、そうすることによって「党的主体の敗北」に対して自己防衛の絶対化を行なっていることをバクロしているのだ。これこそ観念論、形而上学の防主主義であり、反動的ドグマであり、天才論、天命論であり、小ブル自由主義であるのだ。仏君は蜂起派の闘いにさえ真剣に学ばず、その闘いが「一に分かれて二になる」発展に進み、そのことが発展の契機たる積極面、肯定面を継承する弁証法的否定によって総括し、路線を変革して前進することを要求するや否や、「党的主体の敗北」という体の言い言葉で清算して後戻りし、事物の運動・発展の源泉・原動力たる対立物の闘争を暖昧にし、この源泉を外部に主観に求め、ドグマに固守しているのだ。仏君が総括として「軍を組織する過渡期世界党建設」ー「世界党史観」ー「階級服務思想」ー「共産主義軍事思想」を言いたてれば言いたてる程、「世界党史観」は唯一つ仏君の頭の中にのみ実を結んでいる史的観念論の産物であり、超然と絶対者として存在している仏君のドグマをわがものとして服務する修養が「階級服務思想」であり、マルクスレーニン主義の思想ー政治路線・依拠階級・組織建設の路線等とは無関係な、党の軍事を逆転させた超階級的軍事を「共産主義軍事思想」と言いくるめ、それが「軍を組織する過渡期世界党建設」であることがバクロされるのだ。そして今では仏派は、党ー軍ー反帝戦線の党の三極分立構造を、プロレタリアート独裁と共産主義社会をめざすプロレタリソートの階級闘争をマルクス主義的人間観の闘争へと昇天させることによって「統一」しようとしている。

我々は仏派のこのような正体をこれまで余すところなくバクロしてきた。

仏派は更に、生産関係の一側面にすぎない「協労」を生産関係から切り離して独立化させ、一つの理想化された超階級的な抽象的概念にまつりあげ、生産関係から階級性を取り除き、唯物史観を修正

し、小ブル疎外革命論を主張している。（彼らの強調してやまない労働、実践概念は、常に労働の社会的形態、労働における人々の関係、労働の社会的制度を捨象したものである。）そしてプロレタリアートの階級闘争の根拠とその大目的、及びそのための物質的その他の諸条件を資本主義の賃金収隷制そのものに求めず、明らかにしえず、資本に対する労働・労働者を資本とは別個の独立した自立的な市民的権利の主体・自然的人間と把え、資本と賃労働の関係を生産関係として把えずに交換関係として把え、階級闘争の根拠を、資本によって生産されない本来商品になりえない人間が商品に無理やりなるというように、理念的人間の疎外に求めている。そうして「ザインとゾルレンの統一」や「歴史的任務と論理的任務の党による統一」や社会関係の総体と切り離された「マルクス主義的人間観」の小ブル主体性哲学を持ち出し、疎外革命論を主張しているのである。

この同じ立場から今度は一転して、社会発展を発展と運動の見地から把えず、スコラ的に社会主義とは何か、共産主義とは何かといったように無益な言葉の争いに終止し、社会主義ー共産主義社会の生成過程とそれをおし進めるプロレタリアートの階級闘争を否定し、社会主義を何か一度与えられればそれきりのものという、固定した静止した段階の如きありきたりのブルジョア的観念論で把え、原則的資本主義批判に基いて共産主義社会の経済的成熟度を明らかにし、プロレタリアートの闘争の武器を提出している「ゴータ綱領批判」を形而上学的理念にかえてしまい、社会主義的関係が支配的な、基本的なものになってはいるが未だ不純な不完全な社会主義社会の存在を否定し、その下における共産主義継続革命ー資本主義の道と社会主義の道の二つの道の階級闘争の意義を否定している。（ここでも仏派は、これと切り離して「毛沢東は人間改造を重視しているから評価する」といった小ブル的対応、評論をしている。）

五・一五共闘は、綱領ー路線を不問にし、単一党建設も共同の課題としない武闘派共闘ー一つの潮流を形成していこうとする最も重要な共闘であるらしいが、かといって武闘における共闘でもなく、合合法面における部分的共闘であるらしい。（実際、仏派と革左（神）がその思想、政治路線において大きく隔っていることは誰もが周知のことである。）これこそ路線軽視の野合であり、軍事を政治と切り離すことであり、「武闘派」を売り物にするだけの、その政治的任務の全く不明なプラグマチズムの共闘ではないのか。いやその隠された背後に、党利党略の反プロ革を唯一の統一的目的としていたことは、常にそれだけがはっきりと押し出されてきたことによって明瞭ではないか。反プロ革ーしかり、連赤問題総括において、両者は形は左、実際は極右の清算主義として我々と鋭く対立し、その自己防衛のために身を寄せあってきたのである。だがそのようなものが長続きするはずもない。反動的桎梏物はいずれにせよ爆砕されざるをえない。事実それは旧い遺物として凋落しつつあるではないか。我々は今後も形をかえて登場してくる「左」右の清算主義ーそれは常に観念論に基いているー。プロレタリア革命主義標ぼうする者の中からも生まれ始めている新清算主義と断固として闘っていくであろう。

同志、読者諸君！中国第四期全人代＝継続革命ー二つの道の階級闘争の前進、インドシナ革命戦争の戦略的反攻の勝利は世界革命の大業が益々発展し、反帝反社帝世界革命戦争の一大進攻の力が益々強まっていることを全世界に照らしだした。わが革命的労働者はプロレタリア革命主義の旗をさらに高く揚げ、反帝反米反社帝、プロ独・社会主義革命の闘いを「革命（戦争）が（強盗反革命）戦争をおしとどめる」進攻戦略の下におし進め、世界プロレタリアートの先鋒隊として進出していかねばならない。四面党派闘争、党の武装・軍事ー組織戦を更に強化し、プロレタリア単一党ー武闘共闘を！

機関紙局の連絡先ができました

今すぐ「赤軍」紙の直接購読を！

予想される公然販売の実質的禁止弾圧にそなえて

同盟赤軍派（プロ革）及びその機関紙局の連絡先ができました。今後はこれを利用して我々との連絡、機関紙誌の注文等を行って下さい。特に、同盟赤軍派（プロ革）がプロレタリア革命主義の旗を掲げて赤軍派再建ープロレタリア革命戦争再開の攻撃的蜂起の陣型構築へむけて確実な前進を続けていることが徐々に明らかになるにつれ、敵権力の警戒と弾圧は強まっており、我々の「赤軍」紙誌の公然たる販売に対しては遠からず実質的禁止の弾圧が予想されます。その時、既に我々は広範な地下の配布網、革命的文書の非公然通信網を確実に作りあげておかねばなりません。敵の攻撃を空転させ、逆に我々の反撃の力にしていくことは重要な戦術です。そのために、今すぐ、全国の同志、友人諸君、プロレタリア兄弟姉妹たち、すべての読者諸君と直接に手渡し、あるいは郵送する網の目を作らねばなりません。すなわち、すべての読者諸君は今すぐ直接購読の手続きをとって下さい。敵権力の直接弾圧の包囲体制が手薄になっている現在はその唯一最大のチャンスです。敵権力のなしくずしファシズムの攻撃の進捗は書店の自主規制をも強制しており、現在書店で「赤軍」紙誌や各パンフレットを購読されている人も直ちに直接購読に転じて下さい。最初の一回の連絡申しこみでそれは保障されます。尚直接購読の上手な方法はグループでまとめて注文する方法です。グループの総口をひとつにまとめることは敵権力の弾圧に対抗する基本的な方法です。又、注意してほしいのは、申しこみ、通信は必らず封書でし、連絡のとり方を工夫して必ず封書の中に書いていれておくことです。必要な場合は、紙誌郵送上の注意も忘れず書いておいて下さい。

「赤軍」紙は六回一千円（送料共）十二回二千円（同）の単位で申しこんで下さい。六ケ月ではなく六回というのは、近い将来月刊2回に増やす予定だからです。

今すぐ直接購読の連絡体制を結ぼう！

〈確定した連絡先〉

東京都板橋区板橋郵便局私書箱十九号

燎原社

取扱い紙誌パンフレット

※「赤軍」紙再刊準備一号、二号、三・四合併号、五号、六号、各一五〇円（五号のみ二〇〇円）

※「赤軍」誌再刊準備二号（第一次綱領草案）七五〇円

※「赤軍」誌再刊準備三号（労働者下層の分析等）予価五〇〇円　五月刊行予定

※「連赤総括論争」一号（にせ武闘派ー共産同蜂起派批判）三〇〇円

※「塩見孝也論叢」一～八号　各二五〇～四八〇円

※「連赤総括へ向けて」Ⅰ～Ⅲ集　各二五〇～五〇〇円

速報

3・31 連赤―「新党」三周年 赤軍派政治集会闘いぬかれる！

――革命戦争再開への第二の烽火はあがった――

連合赤軍―「新党」三周年を期して、プロレタリア革命主義の旗をかかげた共産同赤軍派再建とプロレタリア革命戦争再開へむけて、全国の同志、友人たち、プロレタリア兄弟姉妹たちへ、昨秋のブロ革派結成―「赤軍」紙誌再刊準備号発行につづいて第二の烽火をあげる赤軍派政治集会が行なわれた。わが赤軍派（プロ革）はこの集会において、プロレタリアート独裁と社会主義革命戦争再開へむけての断々固たる決意を明らかにするとともに、特に、正しい連赤―「新党」の総括の下に、プロレタリア革命主義の総路線を鮮明につきだし、強調した。そして結集した同志、友人たちが、我々プロ革派の連赤総括の立場、観点、方法の正しさ、我々の総路線と活動がどういう階級、階層をひきつけているのか、どういう階級、階層の利益と結びつき、担い、おし進めるものとなっているのか峻別して、プロレタリア革命主義の旗をかかげた共産同赤軍派再建とプロレタリア革命戦争再開へむけて、全国の同志、友人たち、プロレタリア兄弟姉妹たちへ、昨秋のプロ革派結成―「赤軍」紙誌再刊準備号発行につづいて第二の烽火をあげる赤軍派政治集会が行なわれた。わが赤軍派（プロ革）はこの集会において、プロレタリアート独裁と社会主義革命戦争再開へむけての断々固たる決意を明らかにするとともに、特に、正しい連赤―「新党」の総括の下に、プロレタリア革命主義の総路線を鮮明につきだし、強調した。そして結集した同志、友人たちが、我々プロ革派の連赤総括の立場、観点、方法の正しさ、我々の総路線と活動がどういう階級、階層をひきつけているのか、どういう階級、階層の利益と結びつき、担い、おし進めるものとなっているのか峻別して労働者下層であり、総じて労働者であり、総じて労働者下層であり、路線に対する関心と共鳴に基く新しい同志友人たちであった。我々の階級依拠路線―労働者下層と結合し、その利害を体現する党建設の方向は必ず勝利し、日本階級闘争に一大潮流を形成していくであろうことを確信したのである。この集会を期して連赤―「新党」一二人の立場の正しい総括と継承、そして赤軍派（プロ革）の総路線は日本革命的左翼の中軸をなす潮流となるべき内実をはっきりと刻印し、仏派などニセ武闘派とプロレタリア武闘派のあらゆる意味での隔絶を疑いのないものとしてしまったのである。

獄中アピール（上）

塩見孝也

プロレタリア解放の大業のためすべてを捧げて闘った進藤同志、行方同志、遠山同志、山崎同志、山田同志、尾崎同志、小島同志、加藤同志、山本同志、寺岡同志、金子同志、大槻同志ら一二名の同志諸君、日和見主義とはいえ革命のため犠牲となった向山さん、早岐さん、あなたたちが倒れてからはや三年の月日がたった。わたしたちプロ革派は同志たちの階級勤務の思想性、政治姿勢に励まされる中で、昨年同盟赤軍派（プロ革）を結成し、同志たちの立場、遺志を我々の綱領、路線に定式化してたかめて実践的に引き継ぎ、闘いを再開していることを報告しておきます。

同志たちの死は決して無駄ではなかったし、また無駄にはさせません。革命をめざせば、犠牲が出ることは避けがたい。しかし誰れしも犠牲を最少にするように考えることは当然のことであるし、また犠牲を受けるにせよ、なろうことならば、階級敵との戦場の中で、プロレタリア解放闘争に捧げた一命を全うしたいと考えるものである。このような感情にひきくらべた場合、味方と信じた指導部に殺され、しかも死後も資本家とで、あなたがたの深い一つの批判の現われとしても、遺族の方々の立場、感情、意見をとらえ、重視し、しかも階級的立場を見失なわず、自己批判と相互批判の方法で階級的紐帯がつちかわれるよう努力し、また当時の指導部派と、その路線を批判＝自己批判し、亡くなった森君を含め、生き残った指導部派の人々とも連帯し、これらの人々が自己批判、再生できるよう、正しく援助してゆきたいと考えています。実際このような方向で、植垣君、坂東君、永田君等三君は、革命家として、あなたがたの立場に立つよう努力を積み重ねています。

連赤問題総括の基本観点と同志たちの復権は一応確立されましたが、いまだ事実報告は限られ、同志たちを一人一人具体的に復権してゆく作業は不十分で、同志たちには不本意でしょう。今年中には、この作業は、もう一段落前進させるつもりであることを知っておいて下さい。

あなたがた一二名の同志たちをはじめとする連赤―「新党」の諸君の追求した赤軍派―革左（神）派の合流―新党の志向は、新左翼と毛派との合流を主要構成とするプロレタリア単一党とプロレタリア武闘共闘の先駆的志向であった。

同志たちの追求した、この志向を詳しく分析するならば、次の四つに分解されながら把えられる。つまり第一は、階級依拠路線を実行し、階級勤務思想をマルクス主義の理論、思想でもって打ち固め、諸ブルジョア思想と闘い、階級利益、階級原則の観点から敵階級矛盾と人民内部の矛盾を区別し、人民内部の矛盾を正しく処理すること、党―階級の中にプロレタリア独裁の作風―秩序をつくることだったと考えます。第二は、この階級勤務のマルクス主義の思想―理論を武器にして相対的安定期の路線として保守化し、今では反動的側面をもち始めてきた、反スタマルクス主義・反ストロッキズムや毛教条主義（毛利用主義）―スターリン主義を理論的・思想的・政治的に止場（克服）し、毛沢東思想を支持したプロ独・社会主義の政治路線を獲得すること。第三にこの思想路線・政治路線によって、反スタトロッキズムと毛教条主義を同時相互止場した、階級依拠路線をもったプロ単一党を樹立すること。第四に、かかる思想・政治・組織の力、階級依拠路線をもって、銃によるセン滅戦も包せつし、正しく、武装と陣型の問題を解決し、プロ革命戦争の道を前進することだったと考えます。これ等の新党志向が真に七〇年代中期の階級闘争の現状に合致し、正しい志向があったことは増々明りょうになってきています。実際七一年秋の段階では、既に七〇年代革命勢力は登上し、プロ独、社会主義革命との自然発生的結合は、

始まっており、プロレタリア革命勢力の思想的統一、団結をはたす思想路線が問題にされ始めており、第三世界民族解放、社会主義と中国共産党を始めとするアジア三国党を評価し、これと結合することが緊要の任務となっており、赤軍派は旧来からの親毛派ブンドの傾向をいっそう強め、毛沢東思想を自己の革命路線・理論の中に摂取せんとしており、また革左(神)派は毛沢東教条主義を克服し、反帝反米反社帝のプロ独、社会主義革命路線に接近し、ブンド系新左翼と毛沢東派系の革命派の合流でもって、プロ単一党の政治路線を模索し始めていたこと、更に、武装闘争・革命戦争の追求の中から非合法党と陣型問題を解決せんとしていたこと等を考えれば、すぐ肯ずけることです。

ところが、連赤ー「新党」指導部は両派の歴史的限界性に規定され、階級依拠と一体になってマルクス主義を学び、思想問題にこたえ、党ー階級の思想的統一をはかることが出来ず、自己の行動と党ー階級の団結の依り所を、中途半端で修正主義の反スタマルクス主義や、毛語録主義（毛利用主義）の無力・破産を知る中で、一挙に、スターソン主義に対する曖昧な態度を媒介にしつつ、マルクス主義の対極たるブルジョア思想の孔孟の道や、この日本思想の武士道精神や天皇制イデオロギーに求め、反動的修養運動と、他面でのブルジョア刑罰主義の恐怖政治を組織し、これでもって思想的・政治的統一を代行させんとしたこと。このことは、幾分かブルジョア的に反動化しつつあった近代合理主義が、階級闘争の激化の中で、非合理主義にゆきつき、合理主義はマルクス主義へと純化されてゆかざるを得ないという、思想上の画期的分解・再編を意味します。政治面では、「トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止場」の志向を追求しつつも、マルクス主義の原則的部分、つまり弁証法的唯物論、史的唯物論、マルクス主義経済学がわかっていなかったが故に、スタ・トロ論争やスターリン問題に正しい態度がとりきれず、又毛沢東の新民主主義革命と「社会主義下階級闘争存続論、「社帝論」等の反帝、反社帝継続革命を正しく理論的に摂取しきれず、それ故に、トロッキーの「一国社会主義論批判」を批判しきれず、これを曖昧にしたが故に毛教条主義と反スタトロッキズムを徹底的に理論的、政治的に批判しきれず、これをのさばらしたこと。それ故に、同志達の「階級勤務思想ー同時相互止場ー新党建設ープロ革命戦争の陣型獲得」の志向、要求を信じきれず、毛教条主義と反スタトロッキズムとに錯覚して、同志達を粛清せんとしたこと。又組織面では、思想、政治面の弱さ故に、新党志向を大胆に公然と追求し、野合主義の批判を反批判する力をもちきれなかったが故に、独立性を堅持しつつ、綱領討論ー論争を組織する中で合流する方式を追求しきれず、永田「同志」達は、獄中部分から分派する、原則的対応をし切れず、これを軽視し戦闘団主義的に銃によるセン滅戦を前面におし出して合流しようとしたこと。だから、連赤問題の因は、単一党の志向にあるのではなく、従って合流を野合として清算するのではなくて、同志達が真剣にのぞみ追求したように、この単一党の志向をマルクス主義の地盤の上で、合流の組織原則を守りつつ理論的・思想的・政治的に、徹底してやりきれなかったこと、ここにこそあると思います。以上の如く、私達は連赤問題を把え、同志達の新党志向を引き継いでゆくものです。又指導部派は重大な反革命の誤りを犯したが、大局的に見れば、日本階級闘争の最大の難所に於けるそう難という側面もあることを理解し、指導部派が十二名の立場に立ち、再生を志向する限り革命派として復権してゆくものです。一二名の同志諸君！私達赤軍派（ブロ革）は、二度と反革命の反動的思想運動の同志粛清の誤ちをくり返さないよう、マルクス主義をしっかり学び、プロレタリア革命勢力に依拠し、階級的思想性を打ちきたえ、小ブル革命主義をプロレタリア革命主義に止場し、毛沢東思想を支持した、反帝・反米・反社帝のプロ独、社会主義革命の革命闘争を推進し、新左翼の反スタトロッキズムと毛派の毛沢東教条主義を同時相互止場し、テロリズム、戦闘団主義や経済主義、サークル主義を排した階級依拠路線と党建設を主柱とする建軍ー攻撃的蜂起の陣型を構築する決意です。

現在のプロレタリア国際主義の要は、第三世界の民族解放、社会主義と、その指導思想たる毛沢東思想を大胆に、公然と支持、擁護すること、反帝国主義、反社会帝国主義の二正面世界革命戦略を推進することであると考えています。又日本に於ては天皇制ファシズム、イデオロギー、及び社会帝国主義をマルクス主義のプロレタリア世界観と路線でもって労働者人民の階級苦、労働苦を我がものとし打破することだと考えています。折しもこの七五年は、中国を始めとするアジア三国党を指導部とする第三世界人民の攻勢に一段と拍車がかかり、国際帝国主義とソ連社会帝国主義の危機は一層深まっています。日本帝国主義は未曽有の危機にたたされ、この犠牲を集中的に受けた労働者、人民の怨嗟の声は、増々たかまっています。資本家供は自己の破たんを非合理的な天皇制ファシズムの軍事独裁の志向を他方での社会帝国主義を最大利用して延命せんとしているのです。私達は、獲得された連赤問題総括、綱領（草案）をもって、思いきって大胆にプロ革命勢力に依拠し、新旧の日和見主義と闘い、プロ単一党、プロ武闘共闘の陣型構築に前進してゆく決意です。この中で同志達を階級的、実践的に復権、追悼するものです。今日は淀号ハイジャック五周年でもあります。朝鮮の田宮同志等、アラブの同志達も、又全ての赤軍派の同志達も、貴方方の冥福を心静かに祈っていると思います。同志達、どうか安らかにねむって下さい。

三月二五日　塩見孝也

増淵利行

三・三一集会に結集した全ての闘う労働者・人民の皆様に、東拘より固き、そして熱き連帯を求めてアピールを送ります。今や世界帝国主義の泥沼的危機は、より巨大に深化し、全世界における抑圧されている人民は、まさに世界ープロレタリア単一党の結成の勝利を求めています。赤軍派こそ、これに唯一答えうるものであり、その勝利に向けて三・三一政治集会が圧倒的に勝利されることをもつて、今日結集された全ての同志に心からの連帯を表明致します。

世界プロ独ー世界共産主義樹立！

プロレタリア革命主義の旗の下、反帝反米反社帝プロ独・社会主義革命戦線の大道を前進せよ！

（一二頁より続く）

革命的労働者は首尾一貫してその先頭で闘うことによって、抑圧と貧困からの解放、完全な同権と平等の真の内容たる「社会主義革命と階級の廃止」、「あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的隷従の根底にある経済的隷属」からの解放をめざす自己の闘争の公然たる革命的進出を促進し、社会主義革命を激成していかねばならない。とりわけ、部落完全解放の闘いを、プロレタリア階級独裁の思想・秩序・作風・戦闘力を鍛え上げていく一環とせねばならない。「身分闘争と階級闘争の統一」は、革命的プロレタリア党の独自的組織化と、真の意味での階級闘争ープロレタリア階級独裁のための闘争への統率、そしてそれを促進する民主主義闘争の革命的徹底化と労働者階級の指導力の強化としてこそなしうるのだ。

にせ武闘派批判　第五回

共産同蜂起派（さらぎ）批判④

単一党建設の道を否定した野合共闘か、プロレタリア単一党建設の大道にたつ武闘共闘か

――「蜂起」六一号批判――

赤軍派（プロ革）の登場に恐怖した仏派は、赤軍派の再建＝「反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止揚」の単一前衛党建設によって仏派自身がはじきとばされ、「反スタトロッキズムと毛教条主義の野合」のニセ武闘共闘が破産するのをなんとかくいとめんとして、「蜂起」六〇号において、赤軍派（プロ革）の立場が虚像であるかのような宣伝を試みた。しかし、「赤軍」紙再刊準二号によってカウンターパンチをうけるや、昨年一年間にわたって大言壮語をふりまき、プロ革派批判に虚勢をはりつづけてきた威勢はどこへやら、もう弁解におおわらわになってしまった。これは、仏派の立場こそがまやかしであり、虚像であることの端的な傍証というものだ。しょせんブルジョア反革命の反赤軍派キャンペーンに便乗して赤軍派清算、抹殺攻撃をもっぱらにし、赤軍派の建軍武闘の成果を換骨奪胎して略奪し、社帝まがいの勢力拡大方法にしていた仏派だから赤軍派（プロ革）の公然たる登場とそれに続くマルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立脚した原則的批判に直面するやいなや、仏派はその非マルクス主義的本質を自己暴露せざるを得ないのであった。そのため我々からの仏派批判の一部に対する弁解に終始している「蜂起」六一号では、我々の道と仏派の道との違いがより一層鮮明になっている。我々は既に仏派批判をほぼ全面的に展開してきているので、ここでは詳細な批判よりもむしろ、仏派の非マルクス主義的本質をより一層暴露し、マルクス・レーニン主義毛沢東思想に立脚した赤軍派（プロ革）の道を鮮明にしていこうと思う。

階級的党派性のない「階級原則」のもちこみは野合共闘の自己防衛にすぎない

仏派は「われわれは階級原則こそが一切の問題を解決する立場であると考えている」といきなりもっともらしく大上段にふりかぶって読者を脅し、惑わし、我々プロ革派がこの「階級原則」なるものをふみはずしているかのようにほのめかす。しかし、仏派のいう「階級原則」の内容を少し検討してみれば、それがマルクス・レーニン主義の階級的党派性に立脚した我々からの原則的批判から自己防衛せんとする弁解のためにもちだしたにすぎないことがたちまち明らかとなる。さて、彼らはこの「階級原則」とは何か、ということを明確には語らないし、語れないのであろう。しかし、次の主張の背後にそれは十分に読みとれるのである。すなわち「武闘派内論争にあたって階級原則の立場から提起した基準と方向性」の項において、「第一に確認されなければならないのは……日本武装闘争の第一段階（六七年一〇・八羽田～六九年四・二八）を担った新左翼（八派）は日本武装闘争の第二段階を担う過程で蜂起戦争派へと再編せざるをえず、大衆武装の段階から軍を組織する非合法党へと建党建軍する段階へと飛躍しなければならなかった。そしてこの過程でブントは包括的革命理論をもちえずに分裂し、軍事反対派を除く各派が総体として蜂起戦争派に再編されつつ日本武装闘争の第二段階を貫徹したということ……革左も日共宮本一派と訣別してプロレタリア独裁の思想と革命戦争の途を求めて蜂起戦争派へ、そして武闘派ー革命戦争派へと結集した」「第二に確認しなければならないことは、日本武装闘争の第二段階を担った……どの党派も敵権力の弾圧の前に党的主体の敗北をこうむって……現在的にはどの党派も一派だけで階級攻防を攻勢に転換させうるだけの力も、又、他の武闘諸派を単一党へ吸収するほどの総合力も持ちあわせてはいないということ。」従って「第三に、武装闘争の第三段階を切り開くという攻撃的方向で総括し、階級服務思想の弱さを克服し、権力の弾圧に負けないだけの不抜の非合法体制を構築し、全武闘派の同志的共闘を獲得していかなければならないこと……同志的共闘は第一の確認の上に立って日本武装闘争の第二段階を担いぬいた党派を軸に、第三段階を担わんとする部分を結集していかなければならない。また軍事清算派ー軍事召還派と厳しい闘いを貫徹していかなければならない」。

多少長々と引用したのはここに仏派の日和見主義の正体がよく現われているからである。仏派のいう第一の確認事項をみよう。ここには仏派はただ一つの目的だけがある。あたかも彼らがはじめから武闘派であったかのように言いくるめることである。この目的のために、六九年以降の階級闘争、路線闘争の歴史を大々的に歪曲し、建軍武闘の道がどのように切りひらかれ、いかなる段階に到着したのかという肝腎かなめの問題を捨象してしまう。六九年から七二年に至る安保大会戦をどの党派が領導したのかという問題を検討することは重要なことではあろうが、しかし、仏派が武闘派であったかどうかというほど子供じみた確認事項もあるまいというものだ。大切なことは、建軍武闘の道がどのように切り開かれ、いかなる段階に達し、そこで何を問われたか、そしてなぜそれに答えられず敗北したのかという階級闘争及び路線闘争の歴史をしっかり総括し、これからの任務を鮮明にするという全革命派に共通な普遍的問題を解決することである。ところがわが仏派はこの問題からも逃亡し、もっぱら仏派がもとから武闘派であったかのように整合することに腐心する。そしてこれを確認せよといい、赤軍派が「第一の根拠と事実を確認しようとしない」と泣きごとをいうのである。全革命派に共通の根本的課題からにげまわる仏派をどうして武闘派と認められようか！　仏派を武闘派と誤認し共闘するものは、まさにこの歴史的、階級的課題を清算することに共同利益を見出すものだけである。

第二の確認事項をみよう。ここで仏派は、全ての武闘派が敗北したのだと主張して、敗北の以前に分解し、逃亡していった仏派の破産と連赤の敗北との質的懸隔を消し去る詐術を弄して自己の日和見主義路線を隠蔽する。そして「闘わなければ腐敗するが誤って闘えば党は敗北する」と、闘わなくて腐敗した仏派自身のことは棚にあげて（それとも本音では自己の腐敗を認めた表明だろうか。ならば殊勝ではある）七一年革命の中で革命派が直面した課題に挑戦しながらも敗北した連合赤軍の闘いを、新しい課題と共に全面清算している。さらに、現状を発展過程として捉えず、固定的、図式的に捉えて、建軍武闘を自力で切り開ける党派はいないとか、単一党建設

をしえる党派はいないと、ブルジョア政治感覚まるだしの図式を前提する。その意図は、仏派自身の単一党建設・建軍武闘の着手の現在の苦闘の放棄をあらかじめ正当化、弁護すること以外にないが、それだけでなく、赤軍派の現在の闘いー全革命派の直面した根本的課題の解決による単一党建設とその下での建軍武闘の再開の道を必死に否定せんとしているのである。つまり第三の確認事項とは、連赤敗北を赤軍派の必然的結果と総括し、全革命派の直面した課題と共に赤軍派を全面清算し、赤軍派再建ー単一党建設を否定するための確認にほかならない。この清算主義に応じようとしない赤軍派に対し仏派は「第二の根拠の立場に階級原則から立とうとしない」と憤慨してみせる。然り、仏派の過去及び現在の日和見主義を弁解するための非階級的「階級原則」など我々の与するところではない。

第三の確認事項をみよう。七一年革命で問われた課題の解決を通して単一党建設、建軍武闘の再開を果さんとする赤軍派（プロ革）の闘いを清算した上で、ここでは、この新たな課題の清算を共同利益とするニセ武闘派の野合共闘をもちこみ「反スタトロッキリズムと毛教条主義の同時相互止場」による単一前衛党建設の道に立脚した武闘共闘を否定しているのである。そして「階級服務思想の弱さの克服」と一見真摯風のスタイルをとりつくろいながら赤軍派（プロ革）を背後から攻撃しつづけてきたことを隠蔽するために「軍事清算派ー軍事召還派と厳しい闘いを貫徹しなければ」とつけたしたのである。

つまり、仏派のいう「階級原則」とは次のような代物である。六九年以来ニセ武闘派の右翼日和見主義の道をたどってきた仏派を武闘派と認め、七一年革命の中で問われた課題を清算することを共同利益とするニセ武闘派の野合共闘を、赤軍派の道＝単一のプロレタリア前衛党建設とプロレタリア革命戦争の開始の道から防衛し、階級的党派性をもたない小ブルセクト主義を温存する「原則」にすぎない。これは我々の道と真向から対立する。

われわれの階級原則
われわれの三つの確認

我々プロ革派の道は、建軍武闘がいかにしてきりひらかれ、いかなる段階に到達し、何が問われたのかという階級闘争及び路線闘争の総括によって、七一年革命の中で革命派が直面した課題をとりあげ、この課題の正しい解決によって連赤ー七一年革命の敗北を克服し、マルクス・レーニン主義の思想・政治路線によって武装された単一のプロレタリア前衛党建設とこれに立脚した武闘共闘の組織化の下にプロレタリア革命戦争を勝利に導く道である。すなわちこうである。

我々が第一に確認しなければならないことは、六九年以降の建軍武闘ー革命戦争の道が八派共闘の小ブル穏健主義、とりわけ仏派や日向派をはじめとする連合ブントの小ブル日和見主義との党内ー党派闘争を通して切りひらかれ、受動的蜂起主義の克服によってかちとられてきたものであること。そして二・一七闘争、連続強制徴発闘争、六・一七闘争として展開した七一年革命戦争が八派共闘ー連合ブントを解体し、革命戦争勢力の潮流を作り秋期闘争ー沖縄闘争の昂揚を創出したこと。そして、このことが、小ブル学生層の急進的運動に立脚した安保大会戦から組織戦・陣地戦を基軸とする七〇年代革命勢力のプロレタリア独裁運動に立脚したプロレタリア革命戦争への階級戦争の発表をもたらしたこと。その中で、プロ独運動の組織化とそれに立脚した正規的権力闘争＝「銃を軸とした殲滅戦」のための思想・綱領問題、権力問題、作風・規律問題、陣型・戦術問題の党的課題の解決が問われ「いかなる思想・政治路線の下に社会主義革命戦争を遂行するのか」という問題が全革命派につきつけられたのであること。このことは同時に、思想問題の正しい解決を経ないで持ちこされた反スタトロッキズムの一挙的社会主義革命論と毛教条主義の民々革命論の誤りを顕在化させ、日共の政治的死・社会帝国主義化以来革命的左翼の二大潮流を形成した反スタ派の反スタトロッキズム、反スタマルクス主義及び毛派の毛教条主義の同時相互止場による、プロ独の過渡期綱領をもった反帝反米の社会主義革命路線に武装された単一のプロレタリア前衛党を建設することを要求したのである。さて、従って革命派であるか否かの基準はこの課題に挑戦しようとしたか否かにある。仏派が「日本武装闘争を担ったのか担おうとしなかったのかを峻別の基準におく」のは主観的意図ないし現象面をもって基準とするものであり、水準を下げないと仏派が認知を受けられないというお家の事情があるにせよ、この課題を隠蔽する非常に悪質な主張である。換言すれば、この党的課題に挑戦していったものが革命派であり、真の武闘派であるのに対して党的課題から逃亡していったものはニセ武闘派でしかないということである。

つまり、第二に確認しなければならないことは、武闘諸派の敗北の質を検討すると同時に党的課題を正しく解決しなければならないということである。この党的課題に挑戦せず逃亡していったものは、たとえば獄中革左は毛教条主義のセクト主義にしがみつき、殲滅戦を否定して爆弾闘争の主張にとじこもり、路線闘争に敗北してニセ武闘派になりさがったし、あるいは独立戦闘団諸組織のように小ブルゲリラ主義をはびこらせたり、清算主義におちいって受動的蜂起主義に後退していった部分等に分れた。そして、わが仏派たるやこの殲滅戦に直面するやいなや分解し、革命戦争から逃亡してしまったのである。だが、これらに対して、ブルジョア階級の権力機関を徹底して殲滅し、かつ新しいプロ独の革命的秩序を創出せんとした連合赤軍は、この課題から逃亡する日和見主義との党内ー党派闘争と一体にこの課題に挑戦したのであり、「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への飛躍」「反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止場」による正しいマルクス・レーニン主義の思想・政治路線の確立、すなわち、単一前衛党建設の環である思想問題を対象化し、思想問題の正しい解決を通して革命戦争を最後まで指導しうる「新党」を建設せんとしたのである。この思想問題に弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判・科学的共産主義論によって構成されるプロレタリア思想路線でもって答えきることのできなかった「新党」指導部派は、マルクス主義の対極としてある家父長的奴隷制思想たる「孔孟の道」でもって解決しようとして反動化していき、この指導部派の反動化と闘い、これを克服せんとした一二名の革命的同志を粛清していった。しかし、警察機動隊の包囲はこの誤りの克服を要求し、その中で指導部派の一部は不十分ではあれ自己批判の道を自から切りひらき、銃撃戦を貫徹しながら敗北した。ちなみに、仏派の闘わざる敗北と連合赤軍の敗北はこのように質的に完全に異なるのである。

さて、従って七一年革命の敗北を克服するということは「どの武闘派も党的主体の敗北をこうむった」と敗北の質的隔絶を隠蔽して、プロ独運動に立脚したプロレタリア革命戦争のためのすぐれて現在的な党的課題を清算することでもなければ、「現在どの武闘派も一派だけで階級攻防の転換と全指導を行いうる力量はない」と自己の日和見主義を正当化する傍観者的図式を評論して、党的課題の解決を通して果すべきプロ独運動に立脚したプロレタリア革命戦争の開始を否定することでもさらにない。答はひとつ、この党的課題を解決すること。すなわち資本主義批判を核心とするプロレタリア思想路線のもとに「反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止場」をかちとり、綱領・権力問題、作風・規律問題、陣型・戦術問題の解決と一体に単一党建設を基軸とする組織戦によってプロ独運動を組織することである。そして又、実際この党的課題を解決しなくて

は七一年革命の敗北を克服し、その水準を越えて進むことなどできないのだ。かくてこの党的課題を対象化することもできない、従ってその解決を拒否する仏派の「階級原則」は共産主義運動の前進を妨害する主張であるのだ。

こうして第三に確認しなければならないこととして、我々は党的課題の解決へむけて次の任務を定めることができる。思想闘争を基軸とする徹底した理論闘争・路線闘争ー党内・党派闘争を行い、日和見主義のニセ武闘共闘やセクト主義の温存、内的には独立分権主義、小頭主義を粉砕して「反スタトロッキズムと毛教条主義の同時相互止揚」による単一の中央集権的なプロレタリア前衛党建設と党の軍隊「赤軍」建設を意識的におしすすめること。単一党建設の道に立ったプロレタリア武闘共闘を建設し、天皇制ファシズムの抬頭＝なしくずしファシズムの進展と社会帝国主義勢力の成長に徹底して対抗するプロ独運動とそれに立脚したプロレタリア革命戦争を組織していくこと、これが基本的な任務である。以上が我々の階級的党派性に立脚した階級原則である。小ブル学生層に依拠していることの無反省に規定された仏派の「階級原則」は階級的党派性の一片もなく小ブルセクト主義を温存して単一党建設を否定するものでありまさに「無基準の自己防衛」である。これと我々の階級原則は真向から対立する。

われわれは理論闘争・路線闘争を重視する。仏派は甲らに合わせて穴を掘る

仏派の「日本武装闘争」の三段階規定なるものほど階級性を欠落させた規定もあるまい。このかんの階級闘争を三つの段階に区分できるかも知れないが、しかしそれは仏派のような超階級的現象的区分では全く意味をもちえず、階級的性格を明らかにしてこそ区別できるものである。すなわち正しくはこうだ。仏派のいう六〇年代の六九年に至る日本武装闘争の第一段階は小ブル急進運動に立脚した大象的実力闘争、七二年に至る第二段階の安保大会戦は小ブル急進運動に立脚した建軍武闘からプロ独運動に立脚した建軍武闘への転換期、我々が切り開かんとする第三段階はプロ独運動に立脚した社会在義革命戦争である。そして階級闘争のこの三つの変化が路線闘争に反映し、第一から第二段階へ移行する時小ブル穏健主義と小ブル革命主義との闘争、第二から第三段階へ移行する過程で小ブル革命主義とプロレタリア革命主義との闘争がそれぞれ味方内部の主要矛盾の位置を占めたのである。ところが、この階級闘争、路線闘争の発展過程で常に日和見主義の側にいた仏派にはこうした総括はなく、いつまでも労働者階級の階級的利害を代表する階級的党派性は獲得できないのである。そして、仏派の「階級原則」なるものに立って「日本武装闘争の第三段階」など切り開くことは絶対にできない。なぜというに、社会主義革命戦争を徹底して遂行しプロレタリアートの革命的独裁を樹立するためには、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の思想・政治路線によって武装された単一のプロレタリア前衛党建設なしには不可能であると七一年革命の敗北が教えているではないか。出生以来みごとに一貫して二周、三周と遅れてついてきた仏派が、今その遅れを固定化して「……どの党派が勝利しえるのか否かを検証する以外にない」「武装闘争を闘いぬいても弾圧に屈することなき不抜の非合法党を構築して……」と一般的に語って我々からの原則的批判のほこ先をかわそうとしても、階級闘争は仏派の水準にもどってはくれないし、世の中そう甘くはないのだ。そればかりか、セクト主義の温存、野合共闘のもちこみ、プロレタリアヘゲモニーの単一党建設の否定を正当化する仏派の「階級原則」が共産主義運動の前進を妨害する重大な障害物であると明白になった以上、我々は仏派を徹底的に批判し、解体していかねばならない。実際、我々は仏派を解体していく権利を、赤軍派党内闘争ー連赤総括論争への仏派の侵略行為が与えてくれたと考えている。これに関連して、我々が坂口君の小官僚的な内部干渉反対の主張を批判したことと、仏派の赤軍派ー連赤総括への介入策動を批判したことが矛盾していると仏派は唱えている。しかし、今一つ真剣に考えてみればこれは矛盾したものでなく一貫した態度であることがわかる。なぜなら、坂口君の主張は、自から連赤の当事者で、かつ指導部であったことを忘れ去り、赤軍派の連赤総括を内部干渉と称して排撃し、粛清問題をあいまいにして責任回避を試みるものであった。これに対して仏派はそれまでの自己の腐敗と日和見主義、逃亡を棚あげして、自からの武闘派たるアリバイを作るために一人前の顔で介入し、連赤問題を換骨奪胎し、略奪行為を重ね、清算派を助長させ、総括論争ー赤軍派再建を妨害するものであった。一言に、仏派の介入は武闘の成果を略奪し、あまつさえその水準をおしもどそうという社帝まがいの侵略行為であった。我々は連赤総括を深める他方でこれらと闘い、総括論争の混乱をできるだけ排除しなければならなかった。だから仏派の侵略行為に警告を発したのであり、警告を無視するなら仏派を粉砕するほかないのである。

仏派はスターリン主義が仏派式「階級原則」を踏みはずして発生したと無内容な規定をもちだして赤軍派がそのスターリン主義と同じであるかのようにほのめかす。スターリン主義に対するこんな小ブル自由主義的批判はもう卒業すべきである。これだからいつまでも毛沢東思想を正しく継承できず、田中吉六をもちあげる水準を脱皮できないのだ。スターリン主義は、一九三〇年代の先進国革命の敗北という困難の中で、イデオロギー闘争を基軸とする理論・路線闘争の徹底的推進、すなわち上部構造における継続革命によるプロレタリアヘゲモニーの堅持（総じて党建設の強化）とその下でのプロ独の強化に立脚した社会主義建設と国際根拠地化を貫徹しきれないで放棄し、国内外のブルジョア階級に妥協し、かつ「社会主義＝無階級社会」と規定することによって階級・階級闘争とプロレタリアヘゲモニー堅持によるプロ独の強化を否定していくことから発生し、資本主義の復活に道をひらいたのだ、つまり、レーニンや毛沢東は党建設こそを徹底して重視し、イデオロギー闘争を基軸とする理論・路線闘争の徹底的な推進でプロレタリアヘゲモニーを不断に強化したのに対して、スターリンはこれを否定していったのである。かくて、イデオロギー闘争を基軸とした理論・路線闘争によるプロレタリアヘゲモニーの不断の強化＝単一党建設とそれに依るプロ独運動の組織化を否定し、セクト主義を温存する仏派の「階級原則」がまさにレーニンや毛沢東の右からの否定であることが鮮明になる。我々がイデオロギー闘争を基軸とする理論・路線闘争をなにより重視するのは「批判のための批判」に目的があるのではなく、批判を通して日和見主義の非マルクス主義的な思想・理論の誤りの階級的及び認識論的根源を鮮明にすることによって、日和見主義の克服と一体に客観的世界に対する認識を深め、マルクス主義のプロレタリア思想・理論を深め、わけても階級的党派性を強化し党建設を強化していくことができるからである。仏派はこれらのことが全く理解できないことにおいてのみが完ぺきである。仏派は、全武闘派と「日本武装闘争第三期」の地平を自己の低水準に引き下げることによって自派の認知を得、存在理由を手にいれようとする反動的策動を転倒させて出直してくるがよい。

同志からの通信

プロレタリア革命主義の部落解放闘争を！

――「八鹿高校事件」をデッチあげた社帝日「共」の全国一斉攻撃に対する××大学の反撃闘争報告――

日本共産党が部落解放運動に対する公然たる敵対と反革命差別者集団への道に進みはじめて一〇年になる。この一〇年間、日「共」はその敵対、攻撃をますます恥知らずに、あくことなくエスカレートさせてきた。今や日「共」はブルジョア階級のイデオロギー的「左足」尖兵として、全組織力を動員した差別攻撃に没頭している。計画的な全国一斉の反動的な差別キャンペーン、反動的暴力行動、街頭・学校・工場・議会等いたるところでの敵対と差別攻撃。この反動的反革命的差別政党は社会帝国主義以外のなにものでもない。

部落解放運動はその重要な半面において、日「共」社帝派とのし烈な闘争によってこの一〇年間の飛躍的な前進を闘いとってきた。防御から対峙へ、更には逆にジリジリと逆包囲へ転化せしめてきたのだ。おいつめられた日「共」は、今、その憎むべき歴史を部落解放運動に対する「決戦」として総括せんとしている。すなわち昨年一一月不破がブルジョアジーに笑顔をむけて「選挙管理内閣」を云云していたその時、宮本参謀本部は八鹿高校の闘いを部落解放運動との「決戦」とすべく陰謀をこらし、デッチあげの策略をねり、計画的な全国一斉の襲撃を企てていたのだ。これがブルジョアジー・国家権力としめしあわせたものであることは疑いえない。なぜなら、日帝権力が無実の石川一雄氏に無期極刑攻撃を加え部落解放運動と共同闘争に牙をむきだして襲いかかり、帝国主義の全般的恒常的内向的危機の下で部落大衆に犠牲の転嫁を大規模に強制し、なしくずしファシズムの攻撃を開始したまさにその刹那に、この襲撃を先制的計画的に加えてきたからである。

日「共」はこのような悪業の数々と共に次のような反動的理論を吹聴してきた。第一に、階級闘争と国家権力、「身分外の身分」たる政治的身分をすっぽりぬけ落した部落差別起源論である。これは〈階級〉が政治的概念を含んでいることの否定であり、又封建制の人身的隷属に対する一知半解でもある。だから又、近世封建制社会の解体の進展、無産大衆の増大と共に部落が増大し、差別が飛躍的に強化されていったことも無視せざるをえないのだ。だが実際は、古代奴隷制を広範に残存させていた中世封建制が生産力の発展と共に解体していき、激烈な階級闘争が発展する中で、近世領主権力が被搾取階級を鎮圧して近世封建制支配秩序を確立する過程で「身分外の身分」として創出したのである。封建制の人身隷属の下で、農奴身分、手工業身分＝ギルド、商人身分＝貨幣所有者ではなく「身分外の身分」にしばりつけられることによって、古代奴隷の如く家畜と並んで生産の非有機的条件としてその他の自然物の列中に強制されたのである。近世封建制社会の解体過程ではこの封建制そのものと対立する無産の大衆をこの「身分外」の身分へと転化し、束縛し、封建的身分制を維持し、農奴の搾取を強化するテコとしたのである。

第二に、「封建遺制の残りもの」規定の資本主義美化論と部落差別根なし草論の観念論。これは現実そのものによって反ばくされている。彼らは直接的生産過程における剰余価値の生産・資本の生産を、又資本関係の生産を正しく捉えていないのであり、生産手段に対する関係ー労働の社会的制度・社会的富の取得の方法と大いさを正しく捉えることができず、結局のところ消費資料の分配の問題に転落してしまっており、更に又、流通における資本家と労働者の関係を自由対等の関係という仮象の見地に立っているからである。だが事実は逆に、労働用具すなわち生活源泉の独占者に対する働く人々の経済的隷属＝賃金奴隷制が部落差別の根底にある事柄であり、独自的資本主義的生産様式の発展ー労働の実質的従属と、それがマニュファクチュア・家内労働・農業に及ぼす作用と資本の最も残酷な搾取領域の拡大、およびそれとの相互関連にある資本主義的蓄積における相対的過剰人口の不断の再生産とその資本主義的生産の実存条件への転化がその現実的基礎となっている。今日の部落差別は、資本主義的搾取制度・賃金奴隷制を実体とするブルジョア階級支配の基礎づけられた社会的身分差別であり、資本主義的生産様式を基礎とする社会構造によってたえず再生産されている社会的身分差別ということにある。それは帝国主義の腐朽化と寄生性と共に強められ、むしろ日本帝国主義の特質・属性となっているのだ。この社会的身分差別をテコに、部落大衆を時々の蓄積構造（今日では多国的国際ー国内蓄積構造）の犠牲的基底にくみ込み、しばりつけ、よって もって労働者階級への搾取強化、その状態を悪化させるしづめとなしているのだ。

第三は、ブルジョア階級独裁美化の、ブルジョア民主主義による解消論であり、ブルジョア思想に拝跪し、擁護し、吹聴する差別観念否定論である。今や、全くのウソ・欺瞞にすぎない法律上の形式的平等・自由が彼らにとっては全てであり、そのことによって現実の不平等・搾取・抑圧・差別を強化・拡大すべくブルジョアジーに忠勤を努めているのである。

だがまさに、部落差別は、ブルジョア階級独裁の重大な政治的イデオロギー的道具として、プロレタリアートの階級闘争の普遍的発展を抑圧し、きりきざみ、堕落させ、現存の秩序内に「緩和」し、屈服させるための重大な政治的イデオロギー的しづめ（まさに暴力に裏づけられた）として存在し、たかまりゆくプロレタリア革命に対抗する反革命階級政策として組織され、強化され続けてきたのだ。

第四に、日「共」は部落大衆の糾弾権を否定することによって、部落解放運動と共同闘争そのものを否定している。又、部落解放運動におけるプロレタリアートの指導性を強めるのではなく、逆にそれを破壊し、主要に小ブルジョアをブルジョア的利害に組織し、経済主義・融和主義・分裂主義を進める階層別組織論である。そして「窓口一本化」否定と「同和行政の民主的公正的実施」とは、奴隷の思想の吹聴であり、部落大衆をブルジョア階級への従属に駆りたて、部落解放運動を官製の運動へ変質させるものに他ならない。更に今では、日本資本主義の強蓄積の歴史的行詰り、破綻と、金融資本による猛然たる搾取と収奪強化の結果であり、その現われに他ならない「地方自治体の財政危機」に対し、剰余価値の生産、その無制限の拡大を規定的動機・究極目的とする資本主義の下で、過剰資本が住民大衆の生活と福祉のために投下されうることが政策的に可能であるかの如き幻想をまきちらし、搾取者、資本家共力づくで統制し、更に収奪していくプロレタリアートの革命的闘争と革命的方策に反対し、ブルジョアジーと闘うかわりに、逆に「地方自治体の財政危機」や大衆の生活危機を、部落解放同盟の要求闘争や「同和予算」のせいにし、それを攻撃する「闘争」へ大衆を動員せんとしている。「革新自治体」の不可避的な破綻と危機を部落解放同盟の「すずめの涙」ほどの獲得物――それ自身一連の闘争の産物であり、全く正当なものであり、かつブルジョアジーによって奪い返されているものだが――のせいに転嫁し、それに対するねたみと憎しみを駆りたて、攻撃することによって、自己の破綻と危機をのりきり、延命しようとしているのだ。八鹿高校問題における全国一斉襲撃や都知事選問題での固執はこの策動に他ならない。

今日の部落差別の強化は、継続革命＝根拠地化の闘い、第三世界民族解放ー社会主義革命のたかまりと一体的な、日米帝国主義の多国的国際ー国内蓄積構造と国際反革命体制の動揺と破綻、ブルジョア階級支配の動揺と階級闘争の基底からの激烈化・プロレタリア社会主義革命勢力の成長に対抗し、それをなしくずしファシズムー侵略反革命（戦争）の階級支配秩序へと鎮圧・再編せんとする攻撃の重大なテコ・一環としてある。あの政治的な狭山差別判決＝極刑攻撃は天皇制を押し出し

た政治的攻撃や、自衛隊の反革命的動向と軌を一にした敵の重大な決意に他ならない。日「共」＝社帝派はこの中にすっぽりとはまり込み、その一方の独自の尖兵として登場しているのである。

　部落解放運動は、身分差別を廃絶し、完全な同権と平等、抑圧・貧困からの解放を要求する民主主義闘争でありつつ、それ自身のうちに全社会の革命的変革の要求を秘めているのであり、社会主義をめざすプロレタリアートの革命闘争と結びつき、その一環となり、プロレタリア社会主義革命に進出していくことなしには真の解放を実現していくことはできない。又、自己の解放を、同時に全社会を永久に、全ての搾取、抑圧、階級差別と階級闘争から解放する以外に達成しえないプロレタリアートこそ、部落解放の闘いにあっても社会主義と結びつけてその前衛となることができるし、又ならねばならない。事実、部落解放運動は、プロレタリアートの革命闘争の発展と共に、それと並び、結びついて、その一環として真に大衆的解放運動として生まれ発展し、成長してきたのである。

　とりわけ現在の世界大動乱、戦争と革命の時代の成熟にあって、なしくずしファシズムと侵略反革命戦争へのなだれをうつ大攻撃に抗し、プロレタリアートのブルジョアジーに対する革命的戦争＝内戦へ、反帝反米反社帝・プロ独・社会主義革命戦争へと転化していく闘い、その戦烈の一環へと組織していかねばならない。現に部落解放運動が直面しているのは反帝反米・反社帝二正面対峙戦であり、この二正面対峙戦は、今日の世界史的な資本主義から社会主義への革命的転化の時代における、全世界的にますます緊密化し結合する、資本主義の道と社会主義の道の闘い、ブルジョア階級独裁とプロレタリア階級独裁の闘いすなわち世界プロレタリア革命戦争の戦略的対峙―反帝反社帝二正面闘争の前進の一環に他ならない。プロ文革―批林批孔運動は部落解放運動にとっても重大な思想的政治的援助・激励・導きであり、第三世界民族解放―社会主義革命戦争の炎と機関車は部落解放運動にとっても偉大な促進力であり、友である。そして部落完全解放が、ブルジョア階級独裁、資本主義の枠内ではありえず、そこにとどまる限り、それは不可避的に融和主義と部落大衆の一層の犠牲と苦悩と屈従に導いていくこと、日米帝国主義・社会帝国主義と闘う、攻撃的蜂起・プロレタリア階級独裁、ブルジョアジーを打倒し、収奪する革命的道へ進み出していくべきことを明らかにしている。（注）

　経済主義・融和主義・日和見主義の潮流、狭山差別判決＝極刑攻撃・八鹿高校問題での社帝派の一斉襲撃・都知事選問題での帝―社帝の二重のなしくずしファシズム攻撃に恐れおののいて退却しつつある潮流、又問題の核心をぼやかし、回避している追随主義的潮流と闘い、プロレタリア革命派の潮流をつくり上げ、部落大衆の真の広範な下層の大衆である労働者と貧農の同盟を打ち鍛え、小ブルジョア的動揺を麻痺させて、労働者階級を中心とする共同闘争の戦列と被差別統一戦線を、プロレタリア単一党―プロレタリア武闘共闘建設の闘いに結合させ、その一環へと鍛え上げていかねばならない。

　次に掲載する通信は一同志から送られてきた一大学における闘いの報告である。

××大学からの報告

　全国の同志諸君、読者諸君。物量にものをいわせ全国的に差別キャンペーンをはり、部落解放闘争に攻撃を加え続け「八鹿高校事件」を組織的にデッチあげた日「共」＝社帝派はこの××大学にも差別宣伝をもちこみ、あくことなく続けてきた。それは部落解放闘争に対する全国的な敵対、破壊活動の一環である。これに対して我々はまず「八鹿高校事件」の真相を明らかにし、他方、それ自身反動的暴力にほかならない反革命差別キャンペーンを行う「言論の自由」を認めないという断固たる態度で「赤旗」等差別文書の実力没収の画期的な闘いを端緒に、以後大衆的包囲の下で追及、糾弾を敢行した。我々のこの攻勢の下で日「共」は居直りと逃亡においこまれ、あげくに機動隊の出動を要請、その楯の後で差別、反革命活動を続けるという腐敗ぶりを白日の下にさらしたのである。同時にわが××大学の戦闘的同志を次々と告訴し、あらゆる革命的闘争に関する情報と共に数十名を敵権力に売り渡し、社会帝国主義日「共」の階級的本性をさらけだしたのだ。そして本年二月にはこれに乗じた敵権力の不当逮捕に至ったのである。

　今、部落解放闘争を焦点に現在の階級情勢を考慮するならこうである。日帝の強蓄積構造の犠牲的基底部に組みこまれ、日帝権力を頂点とする反動イデオロギーと暴力によって抑圧、差別されてきた被差別部落大衆が長年の不屈の闘いの後、プロレタリア革命勢力の一翼として登場し、今や日本階級闘争の管制高地を占める地点にまで自から成長してきた。これへの日、米帝、日「共」社帝一体となった予防反革命が開始されている。帝国主義の要請に応じて、それを補強、救済する任務を担って伸長してきた日「共」の黒い野望による「決戦」こそ「八鹿高校事件」にほかならない。資本主義の道、ブルジョア階級独裁の道を進む日「共」にとってプロレタリア革命勢力を打倒することは、彼らの延命の条件であり、帝国主義との共通の利害なのだ。だから、日「共」のむきだしの反革命社帝ぶりについていけず、かつ部落解放運動と先進的労働運動におしあげられていた社会党、総評に対して、その小ブル改良主義、議会主義の動揺性をついて　喝し、部落解放闘争を経済主義、融和主義、議会主義にねじまげようと狙ったのである。新左翼諸党派は日帝のなしくずしファシズム―天皇制軍事独裁への周到な強化の前に徐々に屈服し、ブルジョア独裁の道に転落し、革命性を喪失しつつある。実際わが××地方にあっても、農民はブルジョアの収奪、搾取の強化の下でいよいよれい落しプロレタリア化しており、その生活危機意識を即自的に利用して日「共」が勢力を拡大せんとしている。他方では、朝鮮半島の危機に備えてこの地方の道路整備、港湾拡張、基地拡大、原発設置を進める反革命要塞化の謀略、そして右翼突撃隊、ＫＣＩＡ、原理研の暗躍がある。それ故、××大学の闘いは、それまでの右翼と境界をあいまいにした反民青、反修闘争から飛躍することが問われた。部落解放闘争が小ブル的観念論では一歩も進めず、逆に反動的なものになること。反帝反米反社帝、プロレタリアート独裁、社会主義革命へと高めなければならないのである。日「共」を社会帝国主義と明確に規定し、反社帝闘争へと質的転換をとげる中で、右翼とはっきり敵対関係を組織し、この二正面対峙戦の形成によってこの課題を基本的に果しただろう。

　我々はこの地において、社帝、新日和見主義を打倒し、プロ独・社会主義革命へ向けてプロレタリア革命戦争―攻撃的蜂起の陣型をよりいっそう整え、プロレタリア単一党―武闘共闘のために闘う決意であることを全国の同志、友人たち、読者諸君に言明しよう。

　狭山差別裁判糾弾！

　無実の石川一雄氏を奪還しよう！

（注）　とりわけ今日、帝国主義ブルジョアジーが世界―日本プロレタリア革命に対抗して天皇制ファシズムの軍事独裁への再編攻撃を前面におしたてはじめているだけに尚更である。実際、明治の天皇制絶対主義権力が下からの平民的＝革命的民主主義の革命闘争と対抗し、その鎮圧を通じて自已を確立し、その支配秩序の中に部落差別を再編し、半封建的搾取と資本の血ぬられた本源的蓄積の犠牲的基底・餌食へと部落大衆を供して以来、天皇制は常に部落大衆の不具戴天の敵として歴史をともにしてきたのだ。そして今や、全水の革命的伝統は、その敗北＝皇民厚生運動への転化・棄民＝侵略反革命戦争の矢弾への屈従をのりこえて発展させられねばならない。

（七頁に続く）